



前編

01・夏休み、さびれた田舎、川原で出会う

とある年夏。七月二十七日（月）、十八時ごろ。

日本のとある、かなり寒い地域の田舎町。

天気は晴れ。気温は二十四度程度。

涼しく、心地よい夏の夕方。

場所は、主人公の伯父と伯母が経営する民宿……の、近くにある川原。

主人公は今、両親のもとを離れ、伯父と伯母のところに一人預けられているのだ。

そんな主人公は、今、川原にぽつんとたたずんでいる。

買い物帰りだが、まだ帰りたくない。

伯父と伯母は文句のつけようのない善人だが、会うのは数年ぶりだ。

しかも、両親なしで一緒に過ごすのは初めてである。

そんな二人のところへ戻るのは、何となく落ち着かないのだ。

……もう少しだけここにいたい。

だから主人公は、さつきから川原で見つけた『あるもの』を凝視している。

地面にしゃがみ込んで、もつと近づくわけでも、直接触れてみるわけでもなく……。ただ、泥がついて汚れたそれを、じつと眺めている。

それは、何というものではない。

たいていの人は無視するか、そもそも、その存在にも気づかないかもしれないものだ。たとえば主人公だつて『あるもの』に写っているのが、もう少し違う何かだつたら……。そそくさと通り過ぎていた事だろう。

だけど、それはどうしようもなく主人公の目を惹いた。たまらなく気になつて、もう少しだけ見ていたかつた。

『こんなところを誰かに見つかつたら』

そう思いながらも、なぜか離れられずにいるほど、それは、主人公にとつて気になるものだつたのだ。

SE1 川原の環境音

【最初から最後まで流す】

【トラック開始からトラック終了まで、小さめの音で流し続ける】
【0～15秒ほど流してからSE2】

【その後、音量が小さくなる】

SE2 弥映の足音

【最初から最後まで流す】

【遠くから、だんだん近づく】

そこへ、足音が近づいてくる。

人間の足音だが、それにしてはどこか妙な響きだ。

だが『あるもの』に気を取られていた主人公は、気づくのが遅れる。
川原は緑が豊かで、木々や草花の揺れる音がするのがいけない。

主人公がようやく振り向いた頃には『彼女』はもう、すぐ背後にいた。

●中央 少し遠い

【優しく。からかうように、たしなめるように。】

主人公が川原で何を見ていたのかは、まだ気づいていない
こら。こんな所で危ないよー？ そろそろおうちに帰んなさい？

〈主人公〉

「……」

主人公、しゃがみこんだまま顔を上げ、声をかけてきた人物を、ぽかんと見上げる。

そこにいたのは、二十代半ばほどと思われる、美しい女性だった。

『彼女』は主人公を見て微笑むと、風になびいた髪の毛を、顔にかかるないようにそつとよける。

それから、もう一度、ふふ。と小さく笑つた。

その姿は、余裕があつて。

でも、なんだか可愛らしくて、いたずらっぽい少女のような雰囲気もまとつていて。

確実に『大人の女性』ではあるのだが、だがそれだけではないような——……不思議な印象の人物だった。

だが、そんな人が、なぜこんな田舎の川原にいるのだろう。

主人公、まさかこんなところに若い女性が現れるとは思わず、言葉を失う。

……いや、彼女と比べた場合、主人公の方が確実に『若い女性』ではあるのだが……。

SE3 弥映の足音2

【最初から最後まで流す】

【もう少し近づく】

弥映、少し近づき、声の距離感も近づく。

●中央

【親しみを持つて話しかける】

何見てんの？ 虫？

【覗き込んで、それがどうやら雑誌らしいと気づく。

その時点で何を見ていたのかおおむね察するが、もうどうしようもない】

あ、雑誌？

△主人公△

「……あ……」

主人公、慌てて『あるもの』を隠そうするが、時、すでに遅い。

『彼女』の目がそれを確認してしまった。

SE4 アダルト雑誌が風に捲れる音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「……」

主人公、ばつが悪くなつて目をそらすが、もはや言い訳のしようもない。

主人公が見ていた『あるもの』。

それは、捨てられたアダルト雑誌だつたからである。

●中央

「すべてを察した。

だが、いたつて普通のトーンで。あまり聞き手を不安にさせないようにする。

ここで主人公が見ていたのがアダルト雑誌であると理解する】

……ああ』

その時、開かれたページで裸になつて寝転ぶ女性と、目の前の『彼女』の目が合う。

『彼女』は裸の女性を、目を細めて見下ろすと……それから、主人公の方を見た。

それが、たいして気にしていないような表情だつたので、主人公は、なんだかホツとす

る。

●中央

「少し間をあけてから。優しくからかうように」
そういうの好きなんだ。

【少し間をあけてから。優しくたしなめる】

でも、ほどほどにしときなね。

落ちてるものとはいえ。

女の子が川原で工口本（ほん）なんか見てたら、変な人が声かけてくるかもしれないよ】

〈主人公〉

「つ……」

主人公、すべてを見抜かれ、恥ずかしさで顔が真っ赤になる。

走つて逃げ出したい衝動にかられるが、それをしたところで、雑誌に夢中になつた事実
は消えない。

だが、何も言い返せないままではいけない。

主人公はこれでも、学校では秀才で通つてゐる。

本だつてたくさん読んでいるし……要するに、同世代の女子よりも口が回るのだ。

〈主人公〉

「……もう、かけられます」

だが、主人公がやつとの思いで打ち出したカウンターは、彼女の笑顔に吸い込まれた。

●中央

「きよとんと、主人公の言葉を復唱する。声が笑っている。

主人公が反論してきたのが面白いし、確かにその通りだと思う

『もうかけられてる』？

【穏やかに笑う。面白くてしようがないが、大きな笑い声にはならない】

あはは。

【少し間をあけてから。少し楽しそうに。

実際は自分を『変な人』だと思つてゐるが、しれつと否定する】

あたしは変な人じやないよ】

〈主人公〉

「ええ？」

主人公、怪訝な目つきで、改めて彼女を見上げる。

なんだか面白くないが、やっぱりとても美人だ。

目が大きくて、鼻筋の通った派手な顔立ちで、ちょっと頬骨が出ていて――……この前見た映画のヒロインと、顔の系統が似ているような気がする。つまりその位、レベルの高い顔という事だ。

それから、黒髪がとてもきれいだ。

光に当たったところだけが、きらきらと違う色になつて艶めいている。肌は透き通るように白くて、身体は折れそうなほど細くて。だけど、触れたらとても柔らかそうで。

蓮つ葉な話し方をするくせに、なぜか下品な感じはしなくて……。なんだか矛盾しているのだ。

そう。やっぱり……『変な人』だと思う。

● 中央

「あたしは聞きたい事があつて話しかけたの。
【少し間をあけてから】

ねえ。この辺に泊まれるところはある？
急に来たからわからんないんだ

〈主人公〉

「……旅行ですか？」

ここで、話が急に身近なところにジャンプした。

今の主人公にとつて『泊まる』という言葉より身近なものも、そうそうない。
毎日民宿で宿泊客を見ているからである。

●中央

「しれっと、嘘をついていい範囲でごまかす。

本当は『そんな感じ』と言えるものではないが、話を合わせる

うん。そんな感じ。旅行。

昼に適当な電車乗つて。適当にここまで。みたいな

〈主人公〉

「はあ」

主人公、彼女の話に相槌を打ちつつも、なんだか妙だと思う。

だつて彼女は、明らかに軽装だ。

肩に、少し大きめ程度の鞄を一つかけているだけなのである。

主人公が伯父伯母の民宿に来てからは、まだ間もない。

だが、主人公が思うに……旅行者というのは、もつと全体的に重たいもののような気がする。自分だつて、ここに来る時はそうだつたし。

第一、親戚が民宿を経営している身で言うのもなんだが……ここは、何となく遊びに来て、何となく楽しめるような土地では、ない。

しかし、返事をしないわけにもいかない。

（主人公）

「……それで、泊まるところを探してるんですか？」

（中央）

〔『ビジホ』は『ビジネスホテル』の略〕

うん。ビジホでも旅館でも何（なん）でもいいんだけど。

今んとこ、それらしいの見かけなくてさ」

主人公、民宿の事を話すべきか一瞬迷い、川原には沈黙が訪れる。
だが……教える事にする。

〈主人公〉

「うち……ですね」

●中央

「〔思わずオウム返しする〕

うち？

〔主人公の言つている事が、今一つよくわからないので確認する。〕

〔ここでは『あなた』呼びをする〕

あなたんちに泊まれるの？」

主人公、深く頷きつつ、なんだか恥ずかしくなる。

主人公としては、宿泊先を探している人に事実を伝えただけだ。

それから、いつでも宿泊客募集中の伯父伯母の手伝いをしたいだけだ。

……だが、これでは、彼女ともつと一緒にいたくて、自宅に誘つているようである。

自意識過剰かもしけないが。

〈主人公〉

「……正確には、私の、伯父さんと伯母さんの、うち。です。
もうちょっと行つたところで、民宿をやつてるんです。
この辺は、たぶん……うちしか泊まれるところ、ないと思います。
他のところを探すなら、駅まで戻る事になると思う」

主人公が話す姿を、彼女はきょとんとした目で見つめている。

たずねた彼女自身も、まさかこんな展開になるとは思つていなかつたのだろう。

なので、主人公はひたすらに居心地が悪い。

主人公は、自分なりに善意の限りを尽くした。

他人には無差別に親切にする。それが、主人公のポリシーだからだ。

……だが、たつた今アダルト雑誌を読んでいる場面を目撃された女性に、居候先を紹介するはどうなのか。お互い気まずくはなかろうか。

それに、彼女にだつて選ぶ権利はある。

断るなら断つてほしいと思う。

だけど……。

●中央

「事態を理解し、確証を得るために復唱する」

あ、伯父（おじ）さんと伯母（おば）さんが民宿やつてるんだ。

【意外なほど素直に感謝する。主人公に好感を抱き、少し声のテンションが上がる】

教えてくれてありがとう。

じゃあ、そこ連れてつてくれる？』

〈主人公〉

「……えつ？ あ？ ……いい、ですけど」

主人公、意外過ぎて、上手く返事ができない。

主人公は、知らない人と話す事は別に苦手ではない。

でも、なぜか、今はそれがうまくできない。

それは、この、いかにも無礼そうで、こちらを年下扱いしてきそうな女性が、意外なほど素直にお礼の言葉を口にしたからだろうか。

つまり、主人公がそれに驚いてうまく話せなくなっているなら……。

無礼なのは、主人公の方。……のような気がする。

●中央

「ホツとしたように息をつく

はー。

【嬉しそうに】

助かったあ。

【ホツとして、話し方がちょっと幼くなる。

『すごいきちんとした感じの子』とは、主人公の事をさして言っている】

なんかね？ 川んとこに、すごいきちんとした感じの子がいるから。

『この子なら、この辺の事知ってるんじやないか』って思つたんだよね。

【嬉しそうに。素直でかわいい、少女のような雰囲気で。

語尾に『!』がつきそうでつかない程度の、絶妙な声のトーンで】

勘だつたけど大当たりだつた。

【少し間をあけてから。ここで大人ぶつてからかう口調に戻る。

にやにやと楽しげに。優しくからかうよう】

まさか、そんなもの見てるとは思わなかつたけど』※

（主人公）

「なつ……！」

主人公、蒸し返されて真っ赤になり、ますます恥ずかしくなる。

やつぱりこの人は無礼だ。

いや、事実を言つているだけだから無礼ではないのか。

確かに川原で堂々とこんなものを見ている自分も悪い。わいせつ物閲覧罪かもしけない。
だけど、せつかく助け舟を出してあげたのに、蒸し返すのはどうなのか！

なんて嫌なやつだ。ちよつと美人だからつて、ずいぶん不敵にふるまつてくれるものだ。
まつたくまつたくまつたく。なんのなんのなんのなんの……！

と、主人公は頭の中だけでカツカと怒り続けるが、むろん、彼女はそんな主人公をよそに、くすくすと楽しそうに笑つている。

●中央

「にやにやと、優しくからかう。

ただし、アダルトなものに関心がある事を、おかしいとは全く思っていない】

そうだよねえ。気になるよねえ。

あたしもあんた位の年の頃が、一番そういうのに興味あつたもん】

〔主人公〕

「あつ、あつ。あの。この事はつ……」

主人公『どうか伯父さんと伯母さんには言わないで』と懇願しようとするが、相変わらず上手くしやべれない。

主人公は、伯父と伯母の前では優等生で通っている。

少しでも心配をかけるような事はしたくないのだ。

●中央

〔『当然だ』という感じで。伯父伯母に告げ口する気は一切ない】

ああ

だが、彼女は当然のように頷く。

さつきまでねちねちとからかってきたくせに、守るのが当然の秘密のよう言う。

●中央

「楽しげに笑つて。必死になつてゐる主人公が可愛い」
誰にも言わないよ。

【『言うつもりはない』という事を強調するように、さらりと話題を変える】
ほんと助かつたし。ありがとね。
じゃあ、行こつか】

（主人公）

「……あつ、あつ……はい」

だから、主人公は戸惑う。

てつきり、もつと追及されたり、『伯父さんと伯母さんにチクつちやおうかな』なんて
言われて、いじめられたりするのかと思つたのに……。
実際はそうはならなかつた。

つまり彼女にとつては、それ位、性はたわいなくて、日常的に触れるものなのだろうか。
大人とは、そういうものなのだろうか……。

なんだか悔しいけど、そうなのかもしれない……。

主人公、急に彼女が年上らしく見えてくる。

SE5　主人公が立ち上がる音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「……あれ？」

●中央

「不思議そうに。主人公が何を言いたいのかわからないん？」

こうして主人公は、民宿へ彼女を案内しようと立ち上がったが、ここで、ある事に気づく。

彼女の足元が、妙な事になつているのだ。

（主人公）

「……足、どうしたの？」

●中央

「何の事だかわからない」

足？

【ここで、靴のヒールが折れていることを指摘されているのだと理解する】

ああ、靴？

【きほど困つていなかのように、平然と話す】

靴のヒールがね、来る途中で、片っぽ折れちゃったの。

【※マークまで、ほんの少しだけ早口になる。】

『平気だ』とアピールするかのよう】

で。だつたら両方折つた方がマシかなと思つてそうしたら、余計歩きづらくなつちやつて。

でもまあ歩けない事もないし】※

主人公、それを聞いて、息をのみ込む。

今日二度目の沈黙だ。

まつたく、何と手のかかる人なのか……。

いや、別にかかつてはいないのだけれど。

単に私が気になつて、放つておけないだけなのだけれど。

主人公、できれば『とある件』については、このまま黙つていたい。
喜ばれるかわからぬ事に対し、勇気を出すなんて億劫だし、できれば、できるだけ努力しない人生を歩みたいからだ。

……でも、主人公にはそれができない。

自他ともに認める、世話焼き系女子だからだ。

（主人公）

「……ります？ 鞄」

（中央）

「驚いて。主人公が何を言いたいのかわからぬ
へ？」

（主人公）

「足、何センチですか？」

●中央

「ぽかんとして。何が起きているかわからないが、とりあえず質問に答える】

……二十四センチ」

S E 6 主人公が鞄から靴の入った袋を取り出す音

【最初から最後まで流す】

主人公、さつき買つたばかりの靴が入った袋を差し出しながら、今日買つた靴のサイズを思い出す。

漠然とMサイズを買つたはずだから大丈夫だ。

彼女の足が、極端なサイズではなくて良かつた。

一方、彼女は驚いている。それはそうだろう。

偶然話しかけた子が、偶然靴を持つていて。そんな展開、想像できる方がすごい。

● 中央

「驚いて。まさか、主人公が替えの靴を持っているとは全く思っていなかつた
持つてんの？」

〈主人公〉

「……はい……。あります。替えの靴。だから、これ、使って下さい」

● 中央

「【驚いて。まさかそこまでしてくれるとは思わなかつた】

いいの？

ていうか、何でもう一足（いっそく）持つて歩いてんの？」

もつともな指摘だ。でも、靴は実際にここに存在するのだ。
活用するべきだろう。

今の彼女の足元はあまりにもアンバランスで、痛々しくて……見ていて心配になる。

〈主人公〉

「民宿で使おうと思つて……。ちょうどさつき、買つたんです。」

だから未使用なんで、安心して履いて下さい」

●中央

「納得して」

あ。宿の上履き（うわばき）用に買ったんだ。なるほどね。

【気持ちは嬉しいが、なんだか申し訳ない】

でも、自分で使うために買ったんでしょ？」

（主人公）

「……いいから使つて下さい。その靴じや、怪我しますよ」

主人公、ぼそつとつぶやくように言うと、靴の入った袋を彼女に押し付ける。
確かにこの靴は自分用に買ったものだが、この人にあげる事にする。

もう、そう決めたのだ。

SE7 主人公が鞄から靴の入った袋を弥映に押し付ける音
【最初から最後まで流す】

● 中央

「すごく嬉しい。思わず、素で戸惑った声が出る」
あ……。

【嬉しくて、少しうろたえる】
そつ、か。

【少し間をあけてから】

ありがと。

【気づかれないよう、無理やり元の声のトーンに戻す】

じやあ、いただく！

【すごく優しい声で】

あんたって優しいね。

【元の感じに戻つてからかう】

もしかして神様？」

主人公、嬉しいような、なんだかムツとするような、妙な気持ちになる。

『そんなものではございません』と、思わずむきになつて、言う。

〈主人公〉

「神様じゃありません。人間。『那須川 結夏（なすかわ ゆうか）』って人間です」

●中央

「なぜかむきになる主人公が可愛い」

あはは。そりやそうだ。あたしも人間」

〈主人公〉

「お姉さんこそ。何してる人ですか」

主人公が問いかけると、彼女が笑った。

さつきから思っていた事だが、彼女は笑うと、急に幼い印象になる。
まるで少女のように、くしやつと破顔して……悔しいが、それが可愛い。

●中央

「【ここで、名乗つていなかつた事を思い出す】

あ、そうだ。自己紹介してなかつたね。

あたしの名前は……」

ここでフェードアウトして終了。